

桜の解毒効用に注目

文人の 武蔵野

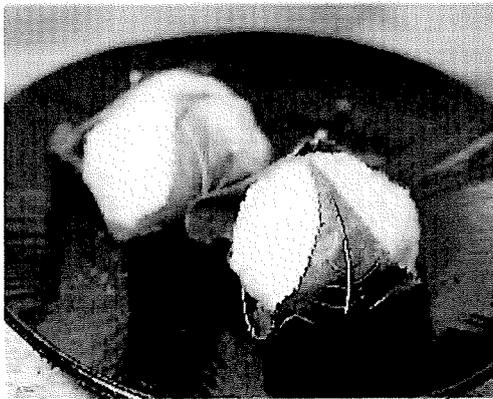
大久保狭南（1737〜1810年）が「武埜八景」で武蔵野の名所の一つとして「金橋桜花」を選定したのは1797年のことでした。金橋（小金井橋）に初めて桜樹が植栽されたのが1737年頃ですので、60年が経過していました。人工種のソメイヨシノであれば成長が早く均一的で寿命も60年ほどですが、小金井橋の山桜が育ち安定するまでには時間を要したことでしょう。

1737年生まれの狭南は、小金井橋の桜樹とともに生まれ、武蔵野で育ち、60歳のときに「金橋桜花」を武埜

大久保狭南「小金井桜樹碑」

八景に選定し、73歳で亡くなる前に「小金井桜樹碑」（1810年）を記しています。まさに小金井桜とともに歩んだ人生でした。

狭南が書き遺した「小金井桜樹碑」には、小金井橋に植栽した樹木が桜である理由として、桜花の開花が「鮮美」であり「清潔」であること、落花が「汚穢」とならないこと、「東方医家」で「水毒」



塩漬けた桜の葉が巻かれた桜餅

を消す「解毒剤」になると言われていることなどが漢文で述べられています。玉川上水が築かれた1653年に小金井橋も建設されたと考えられています。水辺に植えられるのは桜樹ではなかったため、80年以上経った後に桜に植えかえられたことになりました。だとすると、桜である理由はとても重要です。

桜に清潔なイメージがあり解毒の効用があるらしいという衛生的な面については、これまで文人たちのあまり注目するところではありませんでした。佐藤一斎（1772〜1859年）も触れていません。そうした評判を知ってはいても信用していなかった可能性もあります。しかし、現在では、桜の葉と花には「クマリン」という成分が含まれており、「解毒剤」と解することもあながち迷信などではないことがわかっています。クマリンは、ポリフェノール

液凝固作用があり、むくみや老化の予防に効果があります。他方で生物毒でもあり、秋に落葉すると香りだち、他の植物や有害な虫などを繁殖させない効用を発揮するようになります。大量に食べると健康を害しますが、桜餅などに用いると、色香を楽しむだけにとどまらず、美容効果もあると言えます。

大久保狭南作「小金井桜樹碑」を読むとき、そこに記された桜の効用を文学的に解釈するのみではなく、先人たちが経験から導き出した知恵を科学から導き出した知恵によって検証し、その意味を噛み締めることも必要ではないでしょうか。

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

過去の連載は、読売新聞オンラインで読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。



過去の連載は、読売新聞オンラインで読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。